

廃材利用は相変わらず盛んだ。エジプトに持ち出す業者もいるとか



侵攻から3年、 ガザの現状



2008年暮れから2009年1月にかけての3週間、ガザにはイスラエル軍が侵攻、1300人以上の住民が犠牲となり、町はガレキ状態となりました。それからあっという間に3年。昨年暮れから今年にかけてのガザについて報告をします。

ガザの第一印象

2010年に比べると街も人もリラックスしている、というのが第一印象でした。1年前のガザは夜になるとメインストリートも人通りが絶えて野犬が徘徊し、商店の品揃えも少ない状況でした。しかし今回は、店頭には物が増えていて、封鎖の深刻な影響はそれほど感じられません。また、イスラエル軍の侵攻によって破壊された家屋へ補償（イスラエルからではなく、国連を通じて先進国から）がようやく始まり、実際に家を壊された人たちに、大体70～80万円（1万ドル）の現金か資材が届いているとのことでした。ずっと禁じられていた資材の搬入も、2010年

よりはかなり緩んでいて、建設ラッシュが始まると聞きました。

そうした背景か、レストランなども人でいっぱいです。1皿50～90シエケル（1400円～2200円）はするレストランでも、家族連れがいっぱいなのにびっくりしました。去年は閑散としていたからです。ただ、こうしたニューリッチは限られていて、大学を卒業しても就職先がない状況はほとんど改善されず、月に300シエケル（約8000円）でも職があればよいほうだと聞きます。国連や日本などの先進国は、短期の雇用支援事業を展開していますが、月に300ドル程度貰えるものの4ヶ月で終了してしまうので、焼け石に水なのです。

トンネル経済の現状

町では、「トゥク・トゥク」と呼ばれるオート三輪に荷台をつけたものが目立ちます。2011年春以降、エジプトからたくさん入ってきていて、ロバ車の代わりに24時間人や物を運んでいるそうです。エジプトからのトンネルの密輸ビジネスについては、ハマス政府が高い関税をかけていてその総額は年間で500億円以上という説もある一方で、すでに全盛期は終わったという話もありますが、いずれにせよ2010年に比べて経済活動が盛んになっている様子が見えました。いま羽振りが良いのは土地成金と建設関係で、ガザの旧家の多くが不動産を売り払って、海外やヨ

ルダン川西岸に出て行っている一方で、建設ラッシュが始まっているというのです。最近ガザでは二つの大きなスーパーが開店したと言うことでその一つに入ってみました。品揃えは豊富で、イスラエル産、トルコ産、エジプト産の商品が並び、高級なチーズやハムもグラム単位で売っています。ガザで初めてのエスカレーターもあるというもう一つの店はハマスの経営で、スーパーだけでなくファミリーレストランやゲームセンターも併設されているそうです。「ハマスも金儲けに夢中だ」と地元の人が笑っていました。

実態の見える経済

稼ぎの多いトンネル・ビジネスも事故で犠牲者がいまだに出ています。戦闘の続くリビアへの出稼ぎも話題になっていました。高い報酬やビジネスチャンスのために、何年前前はイラクに出稼ぎに行く人が絶えませんでした。今度はリビアです。リビアに比べればガザは天国だといえながら、危険を顧みず多くの人が一旗あげようとしています。ちなみにリビアからはカダフィ政権の高官たちが使っていた高級車がトンネルを通過してガザに密輸されているという噂も聞きました。

パレスチナ社会は元々噂話の好きなどころですが、地元の人にさえ実態の見える話が多い気がしました。ヨルダン川西岸のラマッラーの場合は「和平」と引き換えの海外援助によって支えられている経済だといえますが、ガザの場合は何なのか不可解です。

続いている軍事緊張

チュニジアから始まり、アラブ諸国に広がり、現在も隣のエジプトで続く「民衆革命」。ガザのハマス政府とパレスチナ自治政府（ファタハ）が和解し、連立政府を作ること合

意した背景にはこうした状況があるようです。とはいえブログやツイッター、フェイスブックなどがパレスチナでは相変わらず盛んなものの、長年の「あきらめ意識」が強すぎるためか、社会的変革よりも身の回りの話題がもっぱらで、政治にはなかなか結びつかないとのことでした。スマートフォンを持っている人が予想以上に多かったのには驚きましたが、多くのパレスチナ人が海外に出稼ぎや移住をしているので、家族親族との連絡には無料のインターネット電話を使っている人が多く、こうしたITは彼らの生活には不可欠なのです。

6年間、ハマスが捕虜にしていたイスラエル兵士をパレスチナ人の受刑者と交換で釈放したというニュースは緊張緩和の表れのようにですが、訪問の1週間前には、信号待ちで混雑している大通りの車にイスラエル軍が空爆するなど、ガザの軍事的な緊張が減っているわけではありません。

家庭訪問でみた現実

ガザの様子は表面だけでは分からないというのが、3年前に家を破壊されたアトファルナろう学校の2人の生徒の家を家庭訪問してとてもよく分かりました。

破壊された家のところで呆然とし



[国連の地図より]



[写真上]ロバ車とトゥクトゥク(右)／[写真下]青少年はサッカーが大好き

ている写真をサラーム85号(7ページ)で紹介したアリくんは、いま元気でアトファルナの小学生になっています(今号の表紙写真、一番前の少年)。2009年、家を破壊された家族はガレキの中で仮住まいをしていました。いま元の土地に戻って来て、トタン屋根の小屋に住んでいます。

お父さんによると、一家は難民なのでガザに土地を持っておらず、この場所は政府の土地なので正式な家を建てるのが出来ないそうです。しかし、間借りしていた家の家賃が高かったのが、支援で貰ったお金がなくなるまえに、仮設の家をたてる

ことにしたそうです。「こんな簡単なものでも80万円近くかかり、もう少し良くするためにはあと50万円はかかるので当面は無理だ」と嘆いていました。お父さんは幼稚園の送迎バスの運転手をしていて、月に250ドル(2万円弱)しか貰っていません。しかも幼稚園の長い夏休みは無給です。長年同じ姿勢でいたために背中を痛めていて重労働も出来ず、副収入を得るためパソコン部品の小さな店を開いていましたが、アリくんたちがパソコンに触っているだけで、ビジネスとしては心もとない感じがしました。

焼け焦げたままの家

アハマドくんの家はイスラエル軍の基地として使われ、撤退時に火をつけられました(サラーム85号3ページ)。今回訪ねると3年経っているのに家の外も中もあまり変わっていませんでした。お母さんが飾らずに話をしてくれました。

「家を修理する補助金は政府からいくらかもらいましたが、イスラエル兵に壊された床を新しいタイルに張り替えたのみです。他はまだ焼け焦げたまま。3年前と一緒ですよ。2階は配線もすべて焼け焦げてしまい、その修理だけでも相当なお金がかかります。所有している部分の修繕には補助金が出るというので戻ろうとしたんですが、2階に足を入れるとみんな精神的に落ち込んでしまい、リラックスできません。だからまだ1階で親戚と暮らしています。仕方なく借金してシャワーのボイラーを設置しました。1階は夫の弟のものなので、修繕費がもらえないのです。いずれ夫の弟がここに戻ってくれば出て行かなければなりません」

学校に通えなくなった子どもたち

「長男は高校を3回留年してしまいました。大学試験も1回失敗しました。ようやく入学して行政書士の勉強をしていますが、心理状態がよくないので、あまり熱心に授業に通っていません。また経済状況が悪いので、必要な講義数を取れないです。

中学2年生の二男は戦争の後に発音の問題が出てきました。学校からは「うまく話せず、集中力もなく、友達ともうまくやっていけません。これ以上学校においておけません」と言われました。障がい者のリハビリ団体に行き、そこにいられる満期の14か月までを過ごしましたが、単純な職業訓練で、コミュニケーション

力があがるわけではありませんでした。私は彼に人生に必要な技術を学ぶ機会を与えられないことに罪悪感を覚えています。夫は専門技術を身に着けていなかったの、色々な仕事を転々としてきました。息子たちには何でもいいので、専門技術を身に着けてほしいのです。

アハマドは今15歳中学1年生ですが、変わらずいい子ですよ。勉強より遊びが好きですけどね。とても清潔で身の回りをきちっとします。アハマドは唇を注意深く読もうと努力し、近所の人たちともよく交流しています。でも家の中に食べ物が空っぽの様子を見て悲しみ、手に入ったときはうれしそうで満足した様子です。」



【写真上】アハマドくんとお母さん
【写真下】天井も壁も焼けこげたままの2階

停電と水

「私自身は戦争の前から胃腸に問題を抱えています。特にこの3年間とても具合が悪いんです。ストレスが関係していると思います。夫も安定した仕事には就けていません。戦争後はアトファルナのカウンセリングを受けて本当に助かりました。

戦争直後にあった食料支援は、この2年間ありません。今でも1日8時間の停電が朝か夜かどちらかにあって、ご覧の通り突然電気が切れます。ここ Beit Lahia は良い水が出る地域として有名で、昔は井戸水を飲んでいました。でも今では水質が悪くなり飲み水を買ってポリタンクにためておかななくてはならないのです。」

厳しい心理状況

今年はパレスチナもとても寒い冬ですが、アハマドくんの家族はみな裸足かサンダルばきでした。床は底冷えがします。入口側の窓は枠のみでガラスはなく、台所の窓はビニールでふさがれているだけでした。薄手のジャージ姿のアハマドくんが寒そうに手をずっと脇に入れていたのが印象的でした。手は、ろう者の言



アリくん(左から3番目)の兄弟とお父さん

葉である手話に使うものだからです。訪問中に停電し、2年前にも見たランプが出てきました。通訳をしてくれたイブラヒムさんに「一家の暮らしぶりにショックを受けたよ」と話すと、「僕は君よりショックを受けたよ」と返ってきました。話をすべて理解できる彼にはもっと詳細に窮状が分かったのでしょうか。こうした暮らしの長期化は心理的にも厳しいと痛切に感じました。

国連人道問題調整部による ガザ地区の人権状況 (2011年10月)

- ガザの人口160万人、半数が18歳以下
- 人口の38%は貧困状態
- 失業者は労働力人口の26%、若年層では38%
- 平均賃金は6年前に比べて20%減少
- 人口の54%が食糧問題に直面し、75%が食糧援助を受けている
- 農地の35%、漁業水域の85%はイスラエル軍により「立ち入り禁止区域」にされている
- 毎日5~8万キロリットルの未処理の下水がそのまま海に流されている
- ガザの地下水の90%以上が飲用に適さない
- 小中学校の85%は二交代制(午前と午後のシフト)である
- 封鎖により基本的な医薬品の1/3は在庫がない
- 2010年の初め以来、ガザではイスラエル軍によってパレスチナの民間人64人が殺され、621人が負傷したが、その60%以上は「立ち入り禁止区域」に近づいたためである。またエジプトとの間の「密輸トンネル」関連の事故で60人の死者、137人の負傷者がでている。